



蕪村文集

乾



竹無村文集乾

一 歲旦辭

一 賀辭

Handwritten text in cursive script, likely the beginning of a poem or letter.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a closing phrase.

- 一 松笠辞
- 一 追慕辞
- 一 山平且説
- 一 夢文説
- 一 芭蕉堂再興記
- 一 字治行
- 一 馬堤曲
- 一 櫻盆銘

△上目

- 一 土器書賣賛
- 一 公冠の杖具
- 一 俳仙賛
- 一 狐の尾はよ
- 一 侍る船又

蕪村文集乾

洛 竹巢月居 澗
 湖東 具獨亭忍雪
 洛 醉菴其成 輯

山平且辞

祇園會のそを—もろ、不協新風
 有る律蕉門にたむとるこ、可憐と
 盛盛亭

在りてをたつらむる能潜海

みるるに縁日共の何事かといふの如く
 ありけりまはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 小ちの如くまはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く

みるるに縁日共の何事かといふの如く
 ありけりまはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 小ちの如くまはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く
 してはれぬ事よしとてまはれぬの如く

みるるに縁日共の何事かといふの如く

みるるに縁日共の何事かといふの如く

しるすあはれこころのほろも。またあはれしるす
こころのほろも。しるすあはれしるすあはれしるす
しるすあはれしるすあはれしるすあはれしるす
た。あはれしるすあはれしるすあはれしるす
あはれしるすあはれしるすあはれしるすあはれしるす
又入る。あはれしるすあはれしるすあはれしるす
なま。あはれしるすあはれしるすあはれしるす
海中のほろも。あはれしるすあはれしるすあはれしるす
あはれしるすあはれしるすあはれしるすあはれしるす

帆風のふりしるすあはれしるすあはれしるす

芭蕉堂再興記

四明山下の西南一帯。寺村の縁。名を金福寺とす。土人の稱して芭蕉庵と
呼ぶ。あはれしるすあはれしるすあはれしるすあはれしるす
乃丘あはれしるすあはれしるすあはれしるすあはれしるす
た。あはれしるすあはれしるすあはれしるすあはれしるす

遠くかきまぬたりーきる葎のゆり
 のまをまゝに酒のちりーはくはあま
 と忘播逃殺の命をさるまゝとあや
 りふすちをひらくころ其は葎
 るるちのまを西よさくーまは葎
 のはま眼まのまをさるまゝとあや
 け伐謝の時をまゝーあままこのま
 りままのまのまをさるまゝとあや
 乃古博まゝおぢりの体たまゝとあや

晴くあまて葎をさるまゝとあや
 うちうちうちーまもまのまやまをさ
 りまゝのまのまをさるまゝとあや
 林まゝのまをさるまゝとあや
 ままをさるまゝとあや
 乃ちち杜南のまをさるまゝとあや
 木のまゝのまをさるまゝとあや
 はんまゝのまをさるまゝとあや
 ままをさるまゝとあや

くわさくを 拙者のさむみおとなく
なるま ちよしー乃ちかの大徳よく
あけきく 喜なうち 神書土を 甚意を
とほけ なるぬの 風顔を 甚く
まじき ちよしー乃ちかの大徳よく
あけきく 喜なうち 神書土を 甚意を
とほけ なるぬの 風顔を 甚く
まじき ちよしー乃ちかの大徳よく
あけきく 喜なうち 神書土を 甚意を
とほけ なるぬの 風顔を 甚く

てうののさむみおとなく
なるま ちよしー乃ちかの大徳よく
あけきく 喜なうち 神書土を 甚意を
とほけ なるぬの 風顔を 甚く
まじき ちよしー乃ちかの大徳よく
あけきく 喜なうち 神書土を 甚意を
とほけ なるぬの 風顔を 甚く
まじき ちよしー乃ちかの大徳よく
あけきく 喜なうち 神書土を 甚意を
とほけ なるぬの 風顔を 甚く

めくたく年日流去あつたの訪ふ
一字
小洋
ふくらむるなきさへはせむはの宗
風くろ猪くあ互文字の見解アあなたと
きらんき佛徑を典もすくも物と
けいいてさいるものもあたくくおす
るまなんといとさきく 狂はる
ためよいはらふ。まきまのふくくち
坐す閑は孤あめちとむらひ
まんもんたのきくふくちくか
一字
小洋

あめりやといぬらくもあつた
かほ孫化ふうまたくたか
たふぬあふなくうすくわんく
さくあうらくはくちやくう
をかひくうのくく一州を
てふまき待命日のくめさ
まぬのさまうなはんはま
あめりやをゆくはくち
真桑記の魁首を句をさるる

たつまゝのまゝの方程に相産先を
藍ののりまゝにまゝにまゝに
くも味まゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに

宇治行

宇治の南田の田舎にまゝに
物まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに

歌曲十八首代女迹意題

曰春風馬堤曲

春風馬堤曲 十八首

危小ハや浪を記をさへて馬柳川
去風や堤をさへてさへて

堤下摘芳草 荆与蕨寒路

荆蕨何無情 裂衣裾且傷敗

溪流石點し 踏石撮香芥

多謝水上石 教儂不沾裙

一衣の茶をさへての柳老よりりり

柔店の老はめ子儂をさへての態意

よせの意をさへて一日儂をさへてを美

店中有二客 能解江南語

酒錢擲三罇 迎我讓榻去

古跡をさへての猫見書を呼書をさへて

呼雛籬外鷄 竹籬外艸滿地

雛飛欲越籬 竹籬高隨三四

去る路を又中ふ捷徑あるをさへて

下人何花のつとこにまをみくせんに
三つを白く記得よきまのいぬに
懐くる痛さを離して涙を温
むし〜まをみくせんに
慈母の懐絶ふれまをみくせんに
まをみくせんに〜して涙をよきまの
梅をみくせんに〜して涙をよきまの
まをみくせんに〜して涙をよきまの
御を離〜分ふ身〜身三ま

春をわがまをみくせんに
故にまをみくせんに〜して涙をよきまの
梅をみくせんに〜して涙をよきまの
矯首をみくせんに〜して涙をよきまの
戸子倚る白髪の人身を抱きまをみくせんに
待春よ春
君不見古人在紙上句

兼入の梅をみくせんに〜して涙をよきまの
酒河歌三首

春水浮梅花 南流菟合澗

錦纜君勿解 急瀨舟如電

菟水合殿水 交流如一身

舟中願同寢 長為浪花人

君若水之梅乃若一花あり

滑く去る急し

夢より江野の柳みよる一糸のた

決て去るかたきつたはら

老學見

昔もやうなふくくもひよもひ

去りてはるる去りてはるる

いふはるるるるるるるるる

知りてはるるるるるるるるる

いふはるるるるるるるるる

いふはるるるるるるるるる

一玉のりてはるるるるるるる

余幼き時 有る色は和の骨

一 壺又一 壺をきく 子うき 子ほく
らうき なる なる

土器土質器具

海苔のころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ

ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ
ころころ ころころ ころころ ころころ

公羽の賛

かゝるにふくむるは
もろくもたふすは

守ま貞徳を
ふくむて十田人の位仙を
あつるに賢詞を
け佛仙群會の國をえ
余弱冠の時
こよ四十有る

其操をい
まをく
るは
花敷目
あ

むら
は

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in several lines, starting from the right side of the page and moving towards the left. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

